

平成25年度 大分大学ベンチャー・ビジネスプランコンテスト 実施要領

事業の目的

- ・大分大学学生によるアイデアの発掘と育成を図ること。
- ・大分大学学生の創造能力とチャレンジ精神を養うための事業計画書（ビジネスプラン）を作成し、自ら考え解決していく能力とプレゼンテーション能力を養成すること。

事業概要

主催 大分大学産学官連携推進機構 応募対象者 大分大学所属の学部生及び大学院生

募集対象

自由課題 大学の技術シーズを活用した事業計画。日常生活の周りにおけるアイデアから波及した事業計画。
(但し、アイデアのみではなく、事業化に向けての具体性があるもの。)

設定課題 自治体からの提示課題 ☆詳細は裏面を参照のこと

自治体	課題
別府市	伝統的工芸品「別府竹細工」の国内における販路拡大、知名度の向上を図る方法について
大分市	(1) 過疎化・高齢化が進む大分市周辺地域における取り組みについて (2) 大分市外からの移住促進と人材活用による地域活性化 (3) 大友宗麟を旗印とした「宗麟ブランド」の創出
玖珠町	(1) 国の登録有形文化財「旧豊後森機関庫」を活用した、商店街の活性化について (2) 空き家の活用について
佐伯市	(1) 一般廃棄物中からの紙類抽出について (2) 溶融物冷却時における熱の回収について (3) 地勢を活かした分散型発電方式の適用について (4) 海岸漂着物（流木等）の有効活用はできませんか？ (5) 地域活性化に繋がる空き家利活用策
日田市	(1) 日田市ガイド付まちあるきツアーの魅力アップ計画 (2) スギパーク（皮）の新たな活用方法について (3) スギのエコ商品の開発

応募の留意点

特許権などの知的所有権に関しては応募者に帰属しますので、各自で法的保護をして下さい。

他人の知的所有権を侵害しないでください。著作権などに関して問題が生じた場合は応募者の責任になります。

応募書類は返却しません。応募提案に関して媒体（新聞、雑誌、情報誌など）への掲載は主催者の責任で行います。

審査内容については公表しません。プランの応募書類作成及び発表は日本語で行ってください。

募集期間 平成25年8月29日（木）まで

応募方法 所定の応募用紙に記入の上、下記まで提出のこと。（電子メールによる添付での提出も可）

提出先:大分大学産学官連携推進機構産学官連携部門, E-mail : oitau-ico@oita-u.ac.jp

審査方法

1次審査：書類審査

2次審査：プレゼンテーション審査 平成25年9月中旬予定

表彰 最優秀賞 1件 賞状・副賞（15万円）

優秀賞 1件 賞状・副賞（7万円） 特別賞 1～2件 賞状・副賞（3万円）

※都合により変更する可能性があります。

問合せ先 大分大学産学官連携推進機構産学官連携部門 TEL : 097-554-7981 E-Mail : oitau-ico@oita-u.ac.jp

※優秀作品は、九州管内「大学発ベンチャー・ビジネスプランコンテスト」に応募していただきます。

課題に関する情報

別府市	<p>伝統的工芸品「別府竹細工」の国内における販路拡大、知名度の向上を図る方法について</p> <p>昭和 54 年に伝統的工芸品に指定された「別府竹細工」であるが、プラスチック製品や、安価な輸入品に押され、日用品として目にするのが少なくなっている。美術品として欧米からの人気は高いが、今後若手の作家が伝統を継承していくためには、国内需要の発掘が必要であると考えられる。そこで、国内における販路拡大、知名度の向上を図るためのビジネスプランを提案していただきたい。</p>
大分市	<p>(1) 過疎化・高齢化が進む大分市周辺地域における取り組みについて</p> <p>過疎化・高齢化の進行や小売店の廃業、路線バスの廃止などにより、団地や地域の中で食料品等の日常の買い物に困難な状況に置かれている、いわゆる「買い物弱者」が増えている。現在、移動手段を確保のための「ふれあい交通運行事業」や農産物の販売促進、買い物機会の増加を図るための定期市に対する助成として「地元農林水産物定期市支援モデル事業」を行っているが、今後増加する「買い物弱者」に対する課題解決に向けたビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(2) 大分市外からの移住促進と人材活用による地域活性化</p> <p>今後、定住人口減少と人口構造が変化することが予想されている。大分市が自主自立の自治体経営を行いながら、地域活力を維持し、「市民福祉の増進」に取り組むためには、「住みたいまち」「住み続けたいまち」として選ばれるようまちの魅力を高める必要がある。市外からUターンやIターンを促し地域活性化のためのビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(3) 大友宗麟を旗印とした「宗麟ブランド」の創出</p> <p>本格的な地方分権時代の到来と一層厳しさを増す都市間競争の中、大分市は戦国時代に北部九州の六国を支配し、進取・開明の精神で南蛮文化を取り入れ、豊後府内を日本有数の国際貿易都市として築き上げた郷土の英傑「大友宗麟」を旗印に南蛮文化の薫るまちづくりを進めようとしている。「宗麟ブランド」の確立と、ブランド活用による起業・産業化に結びつけるビジネスプランを提案していただきたい。</p>
玖珠町	<p>(1) 国の登録有形文化財「旧豊後森機関庫」を活用した、商店街の活性化について</p> <p>旧豊後森機関庫(以下、機関庫)は、地元の商工会や保存会・協議会が中心となって保存活動や PR 活動を積極的に行っている。平成 24 年 8 月 13 日に、国の登録有形文化財となったことで、機関庫を活かした更なる活性化・まちづくりが進むことが期待されている。商店街を活性化させるため、機関庫をどのように活かすのビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(2) 空き家の活用について</p> <p>現在、玖珠町には 300 を超える空き家がある。昨今の UJI ターンブームで空き家バンクへの問い合わせは多いが、補助制度や受け入れ体制の不足から契約まで進まないのが現状である。増え続ける空き家問題解消のための、空き家を活用したビジネスプランを提案していただきたい。</p>
佐伯市	<p>(1) 一般廃棄物中からの紙類抽出について</p> <p>市から排出される一般廃棄物量の総量のうち、紙類が占める割合は4割程度となっている。紙類は適切に分別されると再利用可能な有用な資源となることから、『燃えるごみ』として排出、処理されてしまうことがないよう、前もっての啓発活動や小中学生への環境教育に取り組んでいる。ごみ処理施設で受け入れる前、一般廃棄物中から紙類を抽出する仕組みや、ごみピットに受入れたものの中からハード的に抽出する方法等についてのビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(2) 溶融物冷却時における熱の回収について</p> <p>エコセンター番匠は、ごみを高温で溶かして再生する溶融方式を採用している。ごみを溶かす際に発生する排ガス中から熱回収を行い、施設内の使用電力及び給湯に利用する一方、溶融物は最大で約 1600℃の高温となるものの、スラグやメタル等への再資源化のため、水槽へと運ばれ、熱回収をすることなく、液体から固体へと急冷される。溶融物が液体から固体へと相変化する際の熱を効率よく回収する方法について検討いただき、その技術によるビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(3) 地勢を活かした分散型発電方式の適用について</p> <p>佐伯市は、海、山、川等の資源に恵まれた、九州一の面積をもつまちである。これらの地勢を鑑み、例えば、海岸部地域では潮力発電を、山間部地域では風力発電や水力発電等を行い、近隣の住民への供給ができないか？また、災害時に大規模停電が発生した際、集中型に比べ分散型は、電力供給のリスク軽減が図れる可能性がある。佐伯市の地勢を有効利用した分散型発電方式を前提としたビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(4) 海岸漂着物(流木等)の有効活用はできませんか？</p> <p>海岸漂着物の中には、台風大雨により発生した流木・草類が多くみられるが、海水浸水の塩分を含むため、焼却や堆肥化が困難な状況である。(ダイオキシン発生や農作物への影響があるため。)</p> <p>特に、海岸の流木は、その大きさや重さにより運搬や処理も手間がかかる厄介者とされているが、何らかの処理方法とさらに循環型社会に適応した活用方法が確立できないかと考えている。</p> <p>様々なものが混在する海岸漂着物の有効利用を前提としたビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(5) 地域活性化に繋がる空き家利活用策</p> <p>佐伯市では、交流・定住人口の拡大をはかり、地域活性化のきっかけにしたいと考えています。そこで、市内への定住を促進するために空き家バンク<空き家の賃貸・売買を希望する所有者に物件を市に登録、市公式ホームページ等で空き家物件を紹介>という取組を行っているものの、芳しくない状況である。空き家バンクにとらわれず、佐伯市への定住促進、地域活性化を実現する空き家活用のためのビジネスプランを提案していただきたい。</p>
日田市	<p>(1) 日田市ガイド付まちあるきツアーの魅力アップ計画</p> <p>日田市では、着地型観光商品として「ガイド付まちあるきツアー」を実施しているが、利用者の満足度の調査並びに内容の評価が行われていないため、現在のツアーが誘客数の増加やお客様満足度の向上に繋がっているかわからない状況である。そこで、第三者の立場、且つ地域活性の専門分野を学ぶ学生のみなさんの新しい視点により、このツアーの問題点を抽出し、より良い商品としてのビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(2) スギパーク(皮)の新たな活用方法について</p> <p>林業・木材産業を基幹産業とする日田市において、スギやヒノキの皮(パーク)の処理に大変苦慮している年間のパーク発生量は、4万トンでペレットや堆肥として3.6万トン利用されているため0.4万トン(堆積 約 12,000 m³(23m×23m×23m))が未利用となっている。そこで、新たな活用策や堆肥の販売促進のためのビジネスプランを提案していただきたい。</p> <p>(3) スギのエコ商品の開発</p> <p>日田材の新たな活用は喫緊の課題である。エコ商品は、木材の需要拡大に直接つながるものではないが、林業地日田の大きなアピールになるとともに、新たなビジネスにもつながる。日田市上津江町の企業では数々の素材を開発、トレーやうちわ、ファイルなどのグッズを売り出している。そこで、若い世代の発想で、素材の新たな使い方、製品アイデアのビジネスプランを提案していただきたい。</p>